J-3　松島町根廻地区　　2012 年 1 月 15 日（日）

報告者名	岡田　浩樹	被調査者生年	① 1930 年（男）、② 未調査、③ 未調査
調査者名	岡田　浩樹	被調査者属性	① 松島農園経営者、前根廻区長、② 話者①の妻、③ 話者①の娘
補助調査者	小山　　悠		

被災した際の状況

地震の時には夫婦と孫娘が 3 人、家にいた。まず戸が倒れてきて、仏壇が飛んできた。最初の時はよりも、その後の強い余震でどんどん壊れ方がひどくなっている。2 階は物が落ちてきてひどい状況。根廻地区では東松島のディサービスに行っていて波に巻き込まれた 1 人が犠牲になっているが、そのほかは軽い怪我であった。川には近くまでボートが流されてきた。

震災の後に地区から 3 軒移った。地震で家が全壊、根廻は 70 数戸、ほとんどが大規模、もしくは半壊、町に申請した。報道は津波が映像に出るのだけど、松島も根廻も家屋が随分壊れている。今、直せなくて家屋を解体する家が出てきている。自衛隊多賀城 22 連隊がすぐに来たが、海岸部に多くの人数が入っていった。移った家は半壊でも再建を断念した家もある。また全壊した家では他のところに住み、根廻以外に家を建てている人もいるので、いずれ出るのではないか。今から解体する家もあると聞いている。

一段落ついたかというと、これから。うちも家の手直しもこれからしなければならない。茅葺きの家は建て直しに費用がかかる。茅葺きは専門の業者が今回壊滅して、職人もいないので、どうなるかわからない。トタン屋根の 3 倍くらい費用がかかる。

家と行事

5 人家族、夫婦、娘 4 姉妹、孫娘（姉）独身、孫娘（妹）、妻、大里から混入。22-3 歳結婚、結婚 57 年目。結婚 50 年の祝いの席をやった。婿取り、長女は婚出、次女が婿取りで家を継ぐ形にした。三女・四女は結婚して塩竈、仙台に住み、孫をあわせると家族は 20 名近くになる。正月には 17 名集まって祝いをやった。正月のご馳走つくりは大変だった。乾杯を 5 回もやった。昔は泊まりがけで来たが、今はその日のうちに帰る。

お年玉も年齢順に並んでもらい、話をしながらあげる。20 歳までお年玉。本家（自分）は孫が小学校に入ると、机を外孫含めて孫すべてにプレゼントしてきた。ランドセル、中学校の制服などはそれぞれの家で買う。盆にも集まる。また彼岸の墓参り、お祝い会などもやっている。家族は比較的近く（仙台）なので、週末もよく顔を出す。阿部家のそういうよさを孫の代まで伝えたい。曾祖父は分家だったが、オトメヤマの管理を任された家柄。これは庄屋とは別。自分の代でここに家を建てた。

同族関係

法事、かつてはオオホンケの法事にも必ず出席していたが、今はその下の本家の葬式には行く。葬式においてはホンケが重要な役割を占め、葬式を仕切る。

家の継承はリョウモライの例もある

地域と同族

館山の廻りにどちらかと言えば、散在している。もともと館山には城があったという伝説があり、その麓を廻って山の根っこ（根方）に古くから 17 軒の家が移り住み、地名の根廻の由来となった。阿部は他の 2–3 の家（1 軒は潰れた）とともにもっとも古くからここに住む。あっちの沢にこっちの沢に数件ずつ家が散らばっているので、集まるのは大変で、老人会などは難儀だ。後根廻（話者の自宅があるところ）と前根廻がまあ中心。話者家は 700 年前、元祖はどこから来たか不明だが、根廻に移り住んできたという言い伝えがある。大本の本家はオオホンケと呼び、うちは分家の分家で 3 代前に分かれて約 100 年たった。

・話者家は平家の落人という言い伝えがある。阿弥陀如来が話者家の守り（注、これは下根廻の神社の本尊でもある点に注意）。根廻りに同族は 23 戸あり、屋号も櫓場、板が沢などついている。多いときは根廻は 86 戸、今は 70 戸の後半くらいだが、5 班から構成されている。ここの地区（班）5 班は 13 戸。

家のしきたり

祝い料理は新年には煮魚（ナメタカレイ）、トン汁、ゴボウの煮物、どどく（タラの切り身）あるいはコッパヤネ（干したらがささくれて枝のようになっているから）サメ、酢の物、豆など。

しそ巻きは昔作ったのだが、今はあまり作らない。かつて漬け物は一日 1 本をめどに 100 本くらいつけた。古くなった漬け物は鮭の頭と一緒に煮て食べた。味噌、納豆は自家製。豆腐はつくったことがない。

ムラの関係

発展性はないが、まとまって、穏やかな町、同族の数が多く、うまく根廻の全体に広がっているため、話が通じやすい。

生業と労働関係、ムラ

タケノコ：共同販売は県内で 2 番目、17–8 年前

戦前・戦中、戦後の最初からまで共同労働はあったが、むしろ雇いの方が重要。農作業には、相互扶助よりも、年雇いと通いの農民。別の集落から来ていた。手間仕事、お金の高いところに次から次へと移って仕事を変わる。これは機械が入る前まで。雇いはそれを専門に仲介する者（業者ではない）。他の村で田植えなどをやった後に時期がずれたタケノコや椎茸作業にきた。年雇いはナガデマ、自宅の敷地の中に住んで農作業を行った。1 日だけの場合はヒヤトイ。給金はその時の契約金を払う 12 月 24 日に支払い。ナガデマは父親が息子を連れてきてお金を受け取っ

た。うちの場合は、ナガデマ２人、またいつも来る日雇い。14 歳くらいから雇われた。一般に雇い主と雇われ人の関係は悪く、ヒヤトイは長続きしないことが多かった。

タケノコはこの地域の特産で、雇いもそのためであった。最近ではタケノコを共同販売し、これは県内で２番目、17-8 年前に奥さんと数名が一緒になってはじめた。

契約講

契約講はかつて全戸 86 戸の時も全部入っていた。後から来た者も入れるが、共有財産についてはあまり発言権がなかった。戦前には代表は男性の戸主しかならなかったが、戦後は女性も。結婚式に講は関係なく、主に葬式。連絡から納骨まで、また葬儀一切を仕切った。契約講の記録は明治に火事で焼けたため、今は一部しか残っていない。契約講は親戚ではない村人との関わりの中で、もっとも重要な集まり。親戚以外では頼りになる団体である。入会金はなく、移ってきた人には肝煎が入るように言いに行く。

今は葬祭センターに契約講の代表がお悔やみにいくくらいで、講中には長という意味の「講長」はいない。順番に「肝煎」をつとめる。ほぼ一生に一回肝煎があたるが、これは大変な仕事。私は 45 歳ころ肝煎をやったが幸いに葬式がなくて、楽だった。肝煎は段取りなどすべての仕事がかかる。ある日年に６回あり、あまりに負担が多かったので、肝煎の負担を軽くした。

ただし契約講がいつまでも持つかわからない。戦後ずーっと簡素化してきた。最近では、毎年、2-3 名契約講をやめる者が出てきた。最近では総会の時に「やめる」という者まで現れた。その前まではやめる時には酒１升か２升を持ってきたものだが、随分気質も変わってきた。

神社および祭祀とムラの関係

旧暦の９月 15 日に祭り。祭りは大して大きくない。阿弥陀如来と八幡神社と合祀している。御神輿はない。氏子が前の夜に集まるのは「オヨゴモリ」という。子供はまったく関係ない。祭りには家の主人が行き、ご馳走を持って帰ることもある。普通の町の寄り合いに近い。どちらかと言えば、気楽にいろいろな話をする場であったが、最近はそうではない。初原には天神さまの獅子舞があるそうだ。どんと祭りもやらない。自分の家の氏神さまでどんとを納めている。

若い頃は、他の神社に呼ばれていくことはあるが、後根廻と前根廻のそれぞれに神社があるのだが、あまり交流や一緒にすることはない。前根廻は曹洞宗龍澤寺の監督、観音を祭っている。前で祭りをやっていたとしても呼ばれることは昔も今もない。前根廻の神社の正式な名前はよくわからない（通称「子育て観音」）。ただ、神社は地域の人たちが集まって掃除をしたり守っている。初詣でや七五三は塩竈神社に行く。まずは氏神さまが大事で、地域の氏神はそれほどでもないかもしれない。

村の行事

春の彼岸、祝い会、盆踊り。盆は根回り分館に集まって盆踊りもやっていたが、ここ数年低調（つまりやらなくなった）盆踊りは相馬盆踊り。

残したい習慣：唄い

残したいのは契約講の集まりなどであるが、難しいのでは。むしろ孫の代に残したいのは大蔵流の唄いを残したい。戦前は青年のひとつのよい趣味であった。家元は阿部家の者へ、6-7 人の若者が集まって、正月から 20 日間夜に毎晩習った。前の晩に習ったものを翌日さらって、新しい節をならった。19 才ころから習った。戦争で中断し、その後はだんだん衰えた。